

序文

Guest Editor :

江原 茂

Evidence-based medicineが提唱されて久しい。当初は画像診断やIVRの領域では空箱の状態だったevidenceのソースも次第に内容をともなったものになりつつある。evidence-based medicine (EBM)から我々の分野により特化したevidence-based radiology (EBR)への移行は、その内容の充実を反映している。これはevidenceの利用を医療現場に大幅に持ち込むことになり、その適正な利用を知ることが臨床医の資質の一つになりつつあることを示唆している。

EBMやEBRの進展とともに臨床研究自体に要求されるレベルも変化してきた。症例報告はすでに多くの一流紙からは姿を消している。従来の症例シリーズに基づく臨床研究はevidenceレベルの序列の中で大幅に後退している。Evidenceのレベルの上昇は、他の臨床医学の分野でも同様な傾向である¹⁾。雑誌Radiologyでも症例シリーズによる臨床研究はきわめて少なくなっているし、American Journal of Roentgenologyでは原著論文のOriginal researchに対して症例シリーズに基づく研究をClinical observationとして別個に分類されている。新しい分類ではそのClinical observationも無くなるようにしている。

従来、日本からの医学研究は基礎的研究が主流で、NatureやScienceなどに出版される論文は少ないにも関わらず、New England Journal of MedicineやLancetなど臨床医学の一流紙への報告は少ないとされてきた。臨床の現場にある我々にとってこれには特に何の不思議もなく、貧しい日本の病院・医療の実態、慢性的な人手不足、厳しい公的医療の枠組みなど、臨床医学を取り巻く環境は厳しく、そのような臨床研究が育つ環境が整っていない。そして、その困難は緩和されるどころか、さらに増強していく状況にある。そのような中で高いevidence levelを持つ臨床研究を行っていくのは大変な作業である。

本号から2回にわたり、EBM, EBRと研究に関わる基本的な問題を扱う特集を企画した。その意図は、臨床研究における基礎的な側面が臨床医にとっても重要であることへの理解を広げたいという願いにある。日々の忙しさの中でEBRの実践を指向している、また研究への意欲を維持しておられる臨床家にいくらかでも参考になれば幸いである。

参考文献

1. Hanzlik S, Mahabir RC, Baynosa RC, et al. Levels of evidence in research published in the Journal of Bone and Joint Surgery. J Bone Joint Surg Am 2009;91:425-428

(岩手医科大学 放射線医学講座)